

特集：臨床現場における抗菌性物質の応用—現状と展望—*

A Symposium: The Clinical Application of Antimicrobials for Animal Use in the Field—Present State and Prospect—

今回のシンポジウムにあたって

高橋 勇 (日本獣医畜産大学名誉教授)

本会では昭和48年の発足以来、毎年春にシンポジウムを開催し、会の事業目的に沿って薬剤耐性菌、抗菌性物質の適性使用や残留の問題などに関し、各回ごとに時宜に適したテーマを取り上げ、今回で第21回目を迎えた。

しかし、過去20回に取り上げたテーマの多くは動物の主要病原菌の抗菌性物質に対する感受性ないし耐性菌に関する基礎的なものが主体であった。一方、抗菌性物質の臨床応用ないし野外応用面に関しては、第4回に「今後の抗菌剤の野外応用上の問題点」のテーマで取り上げた以後、新しく開発されたいくつかの抗菌性物質に関して、第12, 14, 17, 20回の各シンポジウムにおいて各論的に取り上げたに過ぎなかった。

以上のこととともに、我が国の畜産の現状を考え合わせて今回のシンポジウムでは、「臨床現場における抗菌性物質の応用—現状と展望—」のテーマの下に各動物別に主要な感染症とその抗菌性物質による治療上の問題の現状と展望に関し総合的に取り上げることにした。

そこで、まず、総論として吐山豊秋先生に「我国における動物用抗菌性物質（飼料添加物を含む）使用の現状と展望」の標題で講演をお願いした。それに引き続いてシンポジウムでは、各論として牛、豚、伴侶動物並びに養殖魚を対象に、それぞれの分野の第一線で活躍しておられる4名の専門家の先生方に次のような内容で講演をお願いすることとした次第である。

すなわち、各演者には対象動物種について、①主要な細菌感染症の現状、②それらに対していかなる抗菌性物質がどのように応用されて効果をあげているか、③各薬剤の臨床応用上の問題点、④薬剤の残留や耐性菌など公衆衛生上の問題点への対応、などについて述べて頂くこととした。そしてこれらに関する講演の終了後、参会者を交えた討論を行い、問題点を掘り下げ、臨床家はもとより基礎研究や開発に携わる方々の今後の参考に供したい、というのが今回のシンポジウムの趣旨である。

最後に、本シンポジウムの開催にあたって、ご多忙中にも拘わらず、ご講演を快諾して頂いた5名の先生方に厚く御礼申し上げます。

* 本特集は1994年4月5日に開催された第21回シンポジウムの講演要旨である。